

脳卒中後の体幹パフォーマンスおよびバランス、歩行、機能的能力との関連

武井圭一

健康科学大学健康科学部理学療法学科

目的：本研究の目的は、trunk control test (TCT) と、trunk impairment scale (TIS) を用いて脳卒中後の体幹パフォーマンスを評価すること、およびバランス、歩行能力、機能的能力との関連を検討することである。

方法：対象は、脳卒中発症後にリハビリを施行している急性期以降の患者 51 名 (平均年齢：65±11 歳)。測定項目は、体幹パフォーマンス (TCT 合計、TIS 合計、TIS 静的バランス、TIS 動的バランス、TIS 協調性)、バランス・歩行能力 (the tinetti scale：Tinetti 合計、Tinetti バランス、Tinetti 歩行)、機能的能力として歩行自立度 (functional ambulation category：FAC)、歩行時間 (10 m 歩行速度、timed up & go test：TUG)、ADL (FIM 運動項目) とした。分析は、バランス、歩行能力、機能的能力を目的変数、各体幹パフォーマンスを説明変数とした単回帰分析を行い、次にすべての体幹パフォーマンスを説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を用いて検討した。

結果：TCT の結果では対象者の 24% が満点で、TIS では満点は認めなかった。単回帰分析の結果、TIS 静的バランスおよび TIS 協調性は他の変数よりも回帰係数が低値であった。また多変量解析の結果、すべての目的変数においてTIS静的バランス、TIS 協調性は除外された。10 m 歩行速度以外の目的変数では、決定係数は 50% 以上を認め、Tinetti 合計点、Tinetti 歩行項目、FAC、FIM においては TCT 合計点が第一選択され、TIS 動的バランスを加えることで決定係数が 5～9% 増加した。また、Tinetti バランス項目、10 m 歩行速度、TUG においては、TIS 合計点が第一選択された。

考察：急性期以降の脳卒中患者であっても、体幹パフォーマンスは低下していることが明らかになった。また、TCT は天井効果を来しやすいため、急性期以降の指標には TIS が適していると考えられ、さらに 10 m 歩行速度、TUG とともに TIS 合計点が第一選択されたことから、TIS のほうがより脳卒中患者の歩行能力と関連していることが示唆された。

Verheyden G, et al：Trunk performance after stroke and the relationship with balance, gait and functional ability. Clin Rehabil 20：451-458, 2006

臨床実習における性的問題に対する理学療法学生の意識に関する事前調査

猪股高志

健康科学大学健康科学部理学療法学科

医療職者は患者への介入の際に性に関する問題を認識しているが、対処が不十分と感じている。本研究は、理学療法学生がどのような性的場面で不快感を持つか、授業で対処方法にふれているかについて調べた。

方法：対象はオーストラリアで理学療法を学ぶ大学生 (1～4 年生) 333 人。臨床における様々な性的場面の快適性レベルに関する質問紙として、コーエンの comfort scale questionnaire の修正版を用い、19 項目を設定した (①自慰中の患者の所に立ち入ること、②公然と性的発言をする患者への対処、③密かに性的発言をする患者への対処、④患者に性体験を尋ねる、⑤患者にどんな性行為を行うか尋ねる、⑥乳房か性器の露出を含む検査の実施、⑦患者に性の趣向を尋ねる、⑧男性売春夫、⑨淋病の 30 歳既婚男性、⑩患者の性的質問に答える、⑪AIDS の人、⑫女性売春婦、⑬AIDS の疑いがある人、⑭性について尋ねる 70 歳の未亡人、⑮2 回目の中絶を希望する 21 歳の未婚女性、⑯同性愛女性、⑰性について尋ねる障害者、⑱避妊希望の 14 歳女性、⑲同性愛男性) 尺度は 1 (不快) ～5 (安心)。3、4 年生にはこれらに適切に対応するための授業科目の有無についても質問した。

結果：半数以上の学生が 19 項目中 9 項目で不快と感じ、最も不快と感じた項目は①②③であった。性差では、男性がより不快感を示さなかった項目は②③⑥⑫で、女性は⑯であった。上級生に比べ 1 年生で不快感を示さない項目は⑩⑬⑭⑮⑰であった。3・4 年生の 90% 以上が⑧⑨⑫⑬⑮⑰は授業で対応していないと感じ、50% 以上の学生は 17 項目で対応していないと感じていた。

結論：性的場面に不快感を持つ学生は多く、女子学生でより不快感を持つ傾向があった。1 年生では比較的不快感を持たない傾向がみられたが、臨床実習の体験がないなど臨床場面を楽観的に考えている可能性がある。性的な問題への対処をすべて教えることは困難であるが、今後の研究で不快感の根源を明らかにし、大学教育に反映させることで不快感を減少させることができるだろう。

Pynor R, et al：A preliminary investigation of physiotherapy students' attitudes towards issues of sexuality in clinical practice. Physiotherapy 91：42-48, 2005